



キクは身近で、日本人の心にしつかり根付いている花。花言葉は「高貴」「高潔」。(写真はスプレーギク)

紀南風物

キク



彼岸などの紋日を中心に直売所でも人気のキク

日本人の心にしつくりくる花

秋の彼岸が、近づいてきた。今年9月20日〜26日だ。彼岸と言えは、お墓参りだが、お供え用の花の筆頭格はやはりキクだろう。仏花としてキクが多く使われるのは、日持ちが良いという理由がある。それ以外に、1年中手頃な価格で手に入りやすいこと、加えて、古来から日本人の心にしつくりくる花というイメージが定着しているからではないだろうか。平安時代の頃、キクは、葉や酒、食品など様々な使い方ができることから貴重とされ、和歌にも多く詠まれていた。後鳥羽上皇がキクを好んでいたため天皇家の家紋になったというの有名な話だ。栽培品種のイエギクが日本に渡来したのは奈良時代、中国からだ。現代のキクには、輪ギク、小ギクのほか、洋花のスプレーギクなどがありアレンジにも多用される。JA紀南管内でもキクは古くから、とんだ、上富田、日置、すさみ、串本などで栽培されてきた。地元産のキクだが、少量であり都会に出荷されることは少なく、紋日をピークに地元直売所を彩る。

豆知識 お彼岸って？

ご先祖への感謝と、私たちの修行期間

お彼岸はご先祖様に思いをはせる日。仏教用語で、サンスクリット語の波羅蜜多(はらみた)が語源とされます。その波羅蜜多とは彼岸(とうひがん)、つまり煩惱や悩みを越えて到達する悟りの境地を言います。私たちが住む世界を此岸(しがん)と言い、此岸から悟りの境地に渡るには修行が必要です。お彼岸はその修行の期間とされます。修行には6つあり、布施(ほどこす)、持戒(つつしむ)、忍辱(しのぶ)、精進(はげむ)、禅定(しずめる)、智慧(まなぶ)を実践することが大切だと言われます。お彼岸の墓参りですが、これは日本独特の風習で、インドなど他の仏教国では見られません。農耕儀式や自然崇拝の考えにより、種を播く時期や収穫の時期は五穀豊穡や安全を山々や先祖に祈願したのです。また、日本には万物に神様が宿るとの考えがあり、太陽が真西に沈む春分の日と秋分の日に先祖を供養したのがお彼岸の由来だとされています。このような気持ちでお彼岸を迎えると、さらに感謝の気持ちが沸いてくるのでは…。



キク生産者

とりぶち 鳥瀨 文夫 さん (63) 上富田町生馬

小ギクとスプレーで60年、長年続けていた父のキク作りを受け継ぎ、10年余りになる。小ギクとスプレーギクを合わせて約60年で栽培し、JAの直売所「紀菜柑」などに出している。キクで驚くのは、その品種の多さだが、色の系統に分けると、赤、黄、白、ピンクなどに絞って栽培している。出荷時期は5月から12月までで、もちろん彼岸や盆といった紋日に多く出せるよう、定植時期や電照で工夫している。キクは元々、秋の花だ。彼岸のお墓参りはもちろん、一輪挿しにして家に飾るのも私は好きだ。